

一日一日を生きる

[聖書]出エジプト記 16章 1～5節、13～36節

イスラエルの人々の共同体全体はエリムを出発し、エリムとシナイとの間にあるシンの荒れ野に向かった。それはエジプトの国を出た年の第二の月の十五日であった。荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」

イスラエルの人々はそのとおりにした。ある者は多く集め、ある者は少なく集めた。しかし、オメル升で量ってみると、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた。モーセは彼らに、「だれもそれを、翌朝まで残しておいてはならない」と言ったが、彼らはモーセに聞き従わず、何人かはその一部を翌朝まで残しておいた。虫が付いて臭くなったので、モーセは彼らに向かって怒った。そこで、彼らは朝ごとにそれぞれ必要な分を集めた。日が高くなると、それは溶けてしまった。六日目になると、彼らは二倍の量、一人当たり二オメルのパンを集めた。共同体の代表者は皆でモーセのもとに来て、そのことを報告した。

モーセは彼らに言った。「これは、主が仰せられたことである。明日は休息の日、主の聖なる安息日である。焼くものは焼き、煮るものは煮て、余った分は明日の朝まで蓄えておきなさい。」彼らはモーセの命じたとおりに、朝まで残しておいたが、臭くならず、虫も付かなかった。モーセは言った。「今日はそれを食べなさい。今日は主の安息日である。今日は何も野に見つからないであろう。あなたたちは六日間集めた。七日目は安息日だから野には何もありません。」

七日目になって、民のうちの何人かが集めに出て行ったが、何も見つからなかった。主はモーセに言われた。「あなたたちは、いつまでわたしの戒めと教えを拒み続けて、守らないのか。よくわきまえなさい、主があなたたちに安息日を与えたことを。そのために、六日目には、主はあなたたちに二日分のパンを与えている。七日目にはそれぞれ自分の所にとどまり、その場所から出てはならない。」民はこうして、七日目に休んだ。イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした。

モーセは言った。「主が命じられたことは次のことである。『その中から正味一オメルを量り、代々にわたって蓄えよ。わたしがあなたたちをエジプトの国から導き出したとき、荒れ野で食べさせたパンを彼らが見ることができただけである。』」モーセがアロンに、「壺を用意し、その中に正味一オメルのマナを入れ、それを主の御前に置き、代々にわたって蓄えておきなさい」と言うと、アロンは、主がモーセに命じられたとおりに、それを掬の箱の前に置いて蓄えた。イスラエルの人々は、人の住んでいる土地に着くまで四十年にわたってこのマナを食べた。すなわち、カナン地方の境に到着するまで彼らはこのマナを食べた。一オメルは十分の一エファである。

[序] 我らの日用の糧を

私たちが礼拝のたびに祈る主の祈りの中に「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」という祈りがあります。札幌時代のことでしたが、小学生には「日用の糧」という言葉になじみが無いので、「日曜日の食べ物」と受け取っている子が多くいました。

そこで、日曜日は会社が休みだから「お父さんの仕事が休みだけど、収入が与えられて、ちゃんと食べ

ることが出来ますように」と祈るとか、日曜日は教会の日だから、「教会の牧師先生や家族に十分食べ物が増えられますように」と祈るんだなど、子どもなりに納得していました。可愛いですね。

主の祈りは、主イエス・キリストが弟子たちの願いに答えて、こう祈りなさいと教えて下さった祈りです。今のように式文用に整えられる前の言葉が、新約聖書のマタイ福音書6章とルカ福音書11章に記されています。マタイでは「わたしたちに必要な糧を今日与えてください」、ルカでは「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください」と記されています。今日与えてくださいと毎日与えてくださいと、ニュアンスが違います。

今日は日々に祈る基本的な祈りの中で、食べ物についての祈りを学び直します。

[1] 天からパンを降らせる

150万人を超えるイスラエルの人々が、神さまに守られて紅海を渡り切り、奴隷にされていたエジプトから脱出できました。しかし大集団がシナイ半島の荒れ野を横切って、パレスチナの約束の地に向かうのです。さぞ大変な民族移動だったに違いありません。荒れ野を三日進んで、飲み水の不満が起きました。一ヶ月後には、パンを腹いっぱい食べられないという非難がモーセに浴びせられました。「我々をこの荒れ野に連出し、飢え死にさせようとしている」。

よく考えてみますと、彼らは羊飼いです。エジプトでも農業地帯から離れた牧草地のゴシェン地方で暮らしていました(創世記 46:34)。彼らはおびたしい数の羊・牛・家畜を連れて脱出したのです(12:38)。恐らくロバの背中に当分の食料も負わせていたことでしょう。牧草地を探して羊や牛を養い、その乳を飲み、繁殖させては屠って必要な肉を食べながら、ゆっくりとしたペースで旅を続けたのだと思います。それでもパンを腹いっぱい食べたくなくなったのでした。

神さまはお答えになりました。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている」。七日目は安息日で、働いてはならない日なので、六日目に、二日分のパンを集めなさいというのです。

夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆いました。人々はそれをつかまえて焼鳥を食べることができました。また朝には宿営の周りの地表を、白いうェファースのようなものが、覆っていました。モーセは彼らに言いました。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。だれもそれを、翌朝まで残しておいてはならない」。

ここで大切なことは、次の朝まで残さないでその日のうちに、食べ切ることです。一オメルが一人の一日分で、一家の人数分だけを朝のうちに集めなさいというのです。次の日の食べ物が心配で、余計に集めた人は、腐らせてしまいました。また六日目に二日分集めず、翌朝集めようとした人は、マナを得ることが出来ませんでした。必要な糧とは普段の五日間はその日一日分、六日目は二日分だったのです。

[2] 思い悩むな

イエス・キリストはこうおっしゃいました。「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか」(マタイ6:25~27)。

考えてみますと、私たちは誰しも何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかという 思ひ煩いを抱いています。ましてや100年に一度と言われる世界的経済不況に見舞われています。TVなどで職を失い、住居を失い、お金も底をつき、野宿して炊き出しに集まってくる人々の姿を見ますと、自分たちもそうなっては大変だと怯えてきます。死ぬまでの生活の目安を何としても立てておかなければ、という思ひに駆られます。

エジプトを脱出した人たちは、羊や牛や家畜を連れて、羊飼いをしながらの旅でした。一応食べていけるのです。それでも荒れ野をさすらう不安定な生活でした。定住地に暮していないということから、明日の生活への不安や思ひ煩いが、心の中に湧き上がってきたのでしょう。それが奴隷でもいいから、ゴシェンの地で肉なべを囲み、パンを腹いっぱい食べられた生活に戻りたいという、不満になったのでしょう。

私たちの多くも、彼らと同じではないでしょうか。日本で暮らしているのならば、生活保護や医療保護等の社会保障もありますから、落ち着いて相談すれば、何とか生きていける道が開けて来ます。神さまがちゃんと養って下さいます。行く末をそれほど心配しなくてもよいのではないのでしょうか。

問題は本人の我が強くて、与えられる境遇を受け容れることが出来ない場合です。家族や親戚、或いは世話をしようとしてくれる人と穏やかな関係を結べなければ、誰とでも衝突し、トラブルを惹き起して、誰の助けも得られない孤独に陥ってしまいます。ですから自分を惨めにするのは、本人の我が強いからだと言われます。

神さまは、何かというと直ぐに不平をいうイスラエルの民に、「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる」とおっしゃって、彼らの不平に応じて下さいました。そして彼らが「これは一体何だろう」という食べ物マナを毎日与えて下さいました。まさに空の鳥を毎日養って下さるのと同じに、神さまが必要な食べ物をちゃんと与えて、命を守って下さることを、彼らに悟らせて下さったのでした。

[3] 不思議なパンの与え方

但しこの時神さまは、五日間は毎朝その日の分だけで、六日目は二日分を集めよという、不思議なパンの与え方をなさいました。そして「わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す」とおっしゃったのです。毎日食べ物を手に入れる時に、神さまの指示に従う訓練をなされたのでした。何故でしょうか。

私たちは何事につけても、こうしたいとか、こうあって欲しいという思ひを持っています。しかしそれは、周囲の状況や相手の考えもあって、多くの場合、自分の思ひ通りになりません。思ひ通りにならないと不満がつつり、人と衝突します。ふてくされて投げやりになる人もいます。自分の思ひを通そうとすることを我を張ると言いますが、我が強い人は、助言を聞かず、自分のやりたいようにやって、失敗します。誰の心にも、この我があって、これが不幸の原因になっています。

我を張って多く集めても、結局は家族人数分、各1オメルにしかならない。我を張って密かに翌日まで残しても、腐ってしまう。結局神さまの指示に従うことによって、一日一日を生きていけるのだということで、我を捨てることの大切さを体験的に教えられたのでした。また第七日の安息日には、働きから離れて神さまを礼拝し、神さまの指示を学び、我を捨てて生きていく信仰を養う大切さをお教えになったのでした。我を張るのは、自分の考えや力で何とかしようとするからです。神さまの配慮と知恵と力を信じて、お委ねする信仰を持てば、もっと気が楽になり、思い煩いから救われます。

イエス・キリストはおっしゃいました。「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな」。「あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである」。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」(マタイ6:31～34)。

神さまは私たちに必要なものを、よくご存知なのです。ですから私たちは神さまの支配と愛を単純に信じていれば、必ず必要は満たされます。明日の生活、また死ぬまでの生活の目安が立たなくても、不安や思い煩いは不用なのです。マタイ福音書の祈りは「わたしたちに必要な糧を今日与えてください」でした。今日必要な糧を今日与えてくだされば、貴方の御心に従って今日一日を精一杯に生きていけますという祈りです。

明日はまた明日必要な糧を与えていただき、明日一日を御心に従って、精一杯に生きていきます。こうして今日という一日一日を生きることで、我を捨てて、御心に従う私の毎日が送られていくのです。それがルカ福音書の祈り、「わたしたちに必要な糧を 毎日与えてください」になるのではないのでしょうか。

【結】 分け合いながら生きる

「ある者は多く集め、ある者は少なく集めた。しかし、オメル升で量ってみると、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれに必要な分を集めた」(16:17～18)。不思議な記述ですね。誰でも目一杯多く集めようとしたのではないのでしょうか。それが我というものです。

ところが皆で集まって、量ってみたら、皆が過不足なかったというのです。どうしたことでしょうか。多く集めた者が、少ししか集められなかった人を見て、どうぞと分けて上げたからではないのでしょうか。神さまの御心が行なわれる所に、我を捨てて他を思いやる心が働いたからでしょう。

私たちが生きていく上で、食べ物は無くてはならないものです。それゆえに少しでも多く得ようとして、私たちを自己中心にしてしまいます。しかし一人で生きているわけではありません。我を捨てる祈りが、私たちには、どうしても必要です。神さまは荒れ野の40年を、毎日マナをもってイスラエルの民を養い続け、御心に聞き従って分け合いながら、一日一日を生きる信仰を身につけさせようとしたのでした。私たちも、主の祈りを一緒に唱えながら、皆と共に、一日一日を生きて生きたいものです。

完